九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古典経済学における自然

中村，修
九州大学農学部農政学教室

栗山，純
九州大学農学部農政学教室

https://doi.org/10.15017/23517

出版情報：九州大學農學部學藝雜誌. 48 (3/4), pp.187-194, 1994-03. 九州大學農學部
バージョン：
権利関係：

九大農学芸誌 (Sci. Bull. Fac. Agr., Kyushu Univ.)
第48巻 第3・4号 187-194 (1994)

古典経済学における自然

中村 修・栗山 純
九州大学農学部農政学教室
(1994年1月13日受理)

Nature in Classical Economics

Osamu NAKAMURA and Jun KURIYAMA
Seminar of Agricultural Policy, Faculty of Agriculture,
Kyushu University 46-07, Fukuoka 812

はじめに

本論文では古典経済学の完成者としてのリカード (David Ricardo 1772－1823) の「経済学および課税の原理」(On The Principles of Political Economy, And Taxation) をとりあげ，そこで論じられている経済発展と自然の意味を検討する．

リカードはこの著者の冒頭で，無限の商品を前提に経済学を議論する，と宣言した．

しかし，環境の時代を迎えた現在，有限な自然のうえでの商品が有限であることは共通の認識となっている．

後半ではスミス (Adam Smith 1723－1790) の「諸国民の富」(An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations 1776) をとりあげる．スミスはここで，有限な自然のうえでの有限な商品を議論している．

後の経済学から，古典経済学として一括して評価されたスミスとリカードだが，その自然認識は大きくちがう．

従来，階級闘争の視点，分配の視点によって議論されてきた古典力学であるが，本稿では環境の視点によって，スミス，リカードの各々の自然観と経済理論の関係を論じる．

1．有限な自然の上での無限の経済発展

「経済学および課税の原理」は，大きく3つにわけられる．それは資本主義的商品経済の仕組みを解明する純粋理論としての「経済学の原理」(1～7章) とそれを現実の政策に応用する「課税の原理」(8～18章)，および補稿 (19～31章) である．

この1～7章は従来，資本主義的商品経済の理論として読まれてきた．

しかし，本稿では，「外国貿易」が経済学原理部分の最後に書かれた必然性を明らかにしながらリカード経済学における経済発展と自然の役割を解明していく．

ここでは経済学原理の1～7章にそって，議論を展開していく．

○1章　価値について

リカードは彼の経済学原理の冒頭で，「無限に生産される商品」を理論の前提とすることを明言した．

「欲求の対象となっている財貨のなかの，きわだって大きな部分は，労働によって獲得される．そして，それらの物は，もしわれわれがその獲得に必要な労働を投下する気になれば，ただ一国においてだけでなく，多くの国においても，ほとんど無制限に増加することができるだろう．

そこで，商品，その交換価値，およびその相対価格を規定する法則を論ずる際には，われわれはつねに，人間の勤労によってその量を増加することができ，またその生産には競争が無制限に作用しているような商品だけを念頭におくことにする」*1

「その獲得に必要な労働を投下すれば，ほとんど無制限に増加することができる商品」これがリカード経済学の原点である．

しかし，商品は人間の労働の産物であるだけでなく，そのまえに自然の産物である．いくら労働を投下しても有限の地上の自然からは無限の商品が生みだされることはない．これは，環境の時代の現代では共通の認識である．

ところが，リカードは土地という有限の自然を議論

の中心にすえながら，実に巧妙に，有限の自然から無限の商品をうみだす経済理論を構築していく．

○2章　地代について

○3章　鉱山地代について

イギリス経済が発展し人口が増大すれば，無限に大きく見えていたイギリス一国の自然は相対的に小さくなり，商品の生産にも限界がでてくる．

この2，3章では有限な自然として農地と鉱山をあげ，一国の自然は有限ゆえに経済の発展によって地代が生じることを展開する．

一国の肥沃な土地が人口の維持のために豊富に存在しているときは，地代は存在しない．しかし，人口の増加につれて質の劣った第二等の土地まで耕作されるようになると，第一等地に地代がはじまる．

ここでリカードは自然を二つにわけて地代の発生を論じている．空気や水，気圧や蒸気などは無限であるから，それらには価格がなく，地代は発生しない．一方，土地は有限な自然であるため，地代が発生する．

「もしもすべての土地が同じ性質をもち，量が無限，質が均一ならば，位置が特別の利点をもたないかぎり，その使用に対しては何らの料金請求もおこなわれるはずがない．そうだとすれば，土地の使用に対して地代がつねに支払われるのは，もっぱらその量が無限でなく，質が均一でないからであり，人口の増加につれて，質が劣悪であるか，位置が不便な土地が，耕作されるようになるからである．」*2

リカードのいう地代とは相対地代のことであり，絶対地代は含まれない．地代は，土地が有限ゆえに発生するとリカードは考えていたからだ．

リカードはこの章で単に，地代の発生メカニズムを明らかにしたのではない．後述するよう，リカードにとって地代（地代の上昇）は，経済発展を阻害するものである．それゆえ経済発展のために地代は取り除かれる必要がある．

「かりに，優等地が，増加する人口のための食糧生産が必要とする分量よりもはるかに豊富に存在すれば，地代の上昇はないはずである」*3

「人口の増加を上回る，はるかに豊富な優等地の確保」これこそが，経済学原理を通して一貫して，イギリスの経済発展を論じるリカードの目標になる．

○4章　自然価格と市場価格について

一国の限られた自然の上での経済活動では，一定の自然価格，市場価格が生まれることをこの章でリカードは証明する．

例えば，流行の変化によって絹織物の需要が増加し，毛織物の需要が減少すると，絹織物の市場価格は騰貴し，毛織物の価格は下落する．その結果，絹織物製造業者の利潤は，一般的な利潤率以上になる．他方，毛織物製造業者の利潤は，それ以下になる．利潤だけでなく，労働者の賃金も影響を受ける．

そこで，増加した絹織物の需要にたいして，資本と労働が毛織物製造業者から絹織物製造業者へ移転する．その結果，絹織物と毛織物の市場価格は再びその自然価格に接近し，利潤は通常の利潤に戻る．

このように，資本の特定の部門では，偶発的原因によって，商品価格・賃金・資本の利潤に一時的影響が引き起こされることがある．しかし，利潤や賃金の高いところには，資本や労働が流入しやがて通常に戻るため，全般的な商品価格も，賃金も，また利潤も影響されない．自然価格，自然賃金，自然利潤を規定する法則を論じているかぎり，そうした一時的影響を完全に度外視することができる．*4

リカードの頭のなかでは，複雑な経済社会と経済活動も，理想化・単純化された経済空間のなかでの数学的な経済運動として描かれている．

ここで定義した自然価格，自然賃金，自然利潤の存在は，以下の理論へと発展していく．

○5章　賃金について

自然価格，自然賃金の存在をふまえた上で，5章では，一国の限られた自然，限られた農地と経済発展，賃金の関係が述べられる．

「労働は，売買され，また分量が増減されうる他のすべての物と同様に，その自然価格と市場価格とをもっている．労働の自然価格は，平均的にみて，生存し，彼らの種族を増減なく永続することを可能にするのに必要な価格である」*5

このように賃金は定義される．

経済発展，社会の進歩によって人口が増大すると，より多くの穀物が必要になる．しかし，地代の章で見たように，土地は有限なので，次第に劣等地が耕作され，地代が上昇し，穀物価格が上昇する．穀物価格の上昇は，賃金を上昇させる．それゆえ，社会の進歩とともに，労働の自然価格はつねに騰貴する傾向がある．しかも，4章で論じたように，賃金の上昇は，国内のすべての産業で一様に上昇する．

○6章　利潤について

商品の価格は，資本の利潤と賃金に分割されることを，リカードはこの章で説明する．

それゆえ，経済の発展にともなって賃金が上昇すれば，利潤は低下することになる．

「利潤の自然的傾向は低下することにある．というのは，社会の進歩と富の増進につれて，必要とされる食物の追加量は，ますます多くの労働を犠牲にして獲得されるものだからである」*6

さらに，経済が発展し，人口が増大すれば，賃金は上昇し，利潤率はきわめて低くなり，やがてゼロに近づく．利潤率がゼロに近づくということは，新たな投資がおこなわれないということであり，経済が停滞するということである．2～6章を通してリカードが展開したことは，限られた自然の上の経済は必ず停滞する，ということであった．

1章で無限の商品を前提にしたリカードであったが，一国の限られた自然（土地）の上では経済は停滞する，つまり商品の生産は制限される，という矛盾した結論を導かざるえなかった．

もう一度1～6章を整理すると以下のようになる．

① 経済発展は人口の増加をもたらす．
② 限られた一国の土地の上では，人口の増加は劣等地の耕作を促す．
③ 劣等地の耕作は，穀物価格を上昇させる．
④ 上昇した穀物価格は，賃金を高騰させる．
⑤ 高騰した賃金は利潤を低下させる．
⑥ 利潤率は低下し続け，新たな投資がおこなわれなくなる．
⑦ ここで経済は停滞する．

経済学の原理におけるリカードの目的は，経済の停滞を言うことではなく，イギリスの経済発展の道を探ることである．

経済を停滞させないためには新たな資本の投下を促し続ける必要があり，そのためには利潤率を一定以上に維持しなければならない．利潤率が一定以上であれば，経済の成長が続き，その結果として発展が残る．

しかし，一国の自然は有限であるため，経済の成長にも限界があった．そこでリカードは，一国の有限な自然における経済停滞から脱却するためのマジックを展開する．

「小さいが肥沃な国は，とくに食糧の輸入を自由に許可すれば，資本の巨額の貯えを蓄積しても，利潤率の著しい低下も，土地の地代の著しい上昇も，ともなうことはない」*7

一国の自然には限りがある．それは，その国が大きくても，豊かであっても限りがある．そこで，その一国の自然の限界を破るための手段として，外国からの食糧の輸入が提案される．

一国の限られた自然の上では，限られた食糧しか得られないが，自由貿易によって外国の食糧を得ることができる．外国の優等地から安い食糧を輸入することで，国内産業の利潤率の低下を防ぐことが可能になる．

一国の有限な自然の上で，経済停滞を避けて無限の商品を生み続けることは不可能なことであった．それはリカード自身が証明したことであった．

それゆえ，リカードは一国の有限な自然を脱却する方法として，さらなる経済発展の手段として，次章で自由な外国貿易を提案する．

○7章　外国貿易について

一国の経済の停滞状態を脱するためには，外国貿易によって安価な食糧を輸入する必要がある，とリカードは言う．そこで，この7章では外国貿易が互いの国にいかに有益であるかを比較生産費説を用いて論じた．

リカードの比較生産費説とは，貿易をする両国が国際分業をおこなうことで互いに利益を得ることができる，というものだ．

リカードは，当時，世界の工場であったイギリスの立場を踏まえ，イギリス以外の国々を農業国と位置づける．

「ぶどう酒はフランスとポルトガルで造られるべきだ，穀物はアメリカとポーランドで栽培されるべきだ，そして金物類やその他の財貨はイギリスで製造されるべきだ」*8

リカードは比較生産費説に基づき，新興の産業資本家と消費者を味方にして，自由貿易によって安価な食糧を輸入すべきだと主張した．その結果，イギリスでは1846年に穀物条例が撤廃され外国の安価な小麦が大量に流入し，パン価格は3分の1までに下落する．パン用小麦の4分の3まで輸入に依存するようになりイギリスの農業は衰退する．外国貿易によって，安くて無限な自然（土地）を手にいれた結果である．

一国の有限な自然の上で，無限の商品を生産し続けるというリカードのマジックのトリックがここで明らかにされた．

1章で前提にした無限の商品は，2～6章でリカード自ら否定せざるえなかった．しかし，7章外国貿易を論じることで，イギリスで生産される無限の商品は生き返ったのである．

2．地球規模の経済発展と経済停滞

イギリス一国の経済がその限られた自然の上で停滞すれば，さらに広い自然を求めて外国貿易をおこなえばいいとリカードは提案した．

しかし，一国の経済が一国の自然の制限の中で停滞したように，経済が地球規模まで拡大すれば地球の自

然の限界のなかで，地球規模の経済の停滞が訪れることは避けられない．

「まさに人類の欲求願望が要求するほど豊富に供給され続けるような商品は，全くない」[*9]とリカードが言うとき，地球上での商品の生産が有限であることを，リカードは認識していた．

一方リカードは，当時のイギリス経済と比較して，地球の自然は十分に大きいこともまた確信していた．当時のイギリス経済が地球上の自然を消費し尽くすまで発展する余地は十分あると考えていた．

「もし万一わが国の進歩がより緩慢になったら，もし万一われわれが静止状態に到達したならば（この状態から，われわれはまだはるか遠くにいると私は信ずるが）」[*10]

「この状態」とは2～6章で論じた，限られた自然のうえでの経済停滞である．ただし，2～6章ではイギリス一国の経済の静止状態であったが，「この状態」とは地球規模での経済の静止状態を指す．

「この状態から，われわれはまだはるか遠くにいると私は信ずるが」と彼がいうとき．リカードは地球規模の自然と比べてイギリス一国の生産は小さく，今後成長する余地が十分であることを認識していたのである．

以上を踏まえれば，1章で前提にされた「無限の商品」は，あくまで理論上の仮説にすぎなかったことは明らかだ．言葉通りの真に「無限の商品」など地上に存在するはずがない．

しかし，当時のイギリスにおいて，世界の工場として商品を生産し世界中に販売することは，実質的に「無限の商品」の生産であった．いくら生産しても足りないほど，販売先はあった．

そして，自由貿易で無限の商品とひきかえに，地代の上昇しない無限の自然も手に入れることができた．それは具体的には外国の安い農産物であった．アメリカなどから輸入される安価な穀物は，当時のイギリス一国の人口にとっては，十分に無限の自然であった．

地球の自然は有限ではあるけれど，イギリスの工業生産や人口と比較すれば地球は十分に大きく，自然は暫定的に無限とみなすことができた．

こうした認識にたって，リカードは地球規模の無限の自然を前提にした「無限の商品」を仮定したのである．

ここから二つのことが導かれる．

リカードは彼の経済学の原理を，地球規模の自然の限界に達するまでの（暫定的な）「成長の理論」として論じた，ということだ．

地球上での経済成長は永遠に無限に続くのではなく，その自然の枠組みに制限される．その枠組みのなかで，限界に達するまでの一時的な成長の理論としてリカードの経済学の原理は書かれた．

次に，この経済学の原理は，経済は自然の限界まで成長すると必ず停滞し静止状態になるという「停滞の理論」でもある．2～6章はまさにそうであった．

つまり，リカードの経済学は，「成長の理論」であり同時に「停滞の理論」であった．

しかし，地球規模での経済の停滞，静止状態は，当時のリカードの時代の経済学の課題ではなかった．イギリスにはまだ豊かな自然が存在し，外国貿易によってさらに豊かな自然を獲得する可能性があった．リカードは有限な自然の上での経済の停滞をことさら論じる必要はなかった．むしろ地球規模という限界までイギリス経済が成長する可能性を論じることが，リカードに求められた課題であった．

それゆえ，7章外国貿易が経済学の原理の最後に論じられたのだ．

リカードは7章外国貿易を論じることで，一国の経済停滞を脱して地球規模までイギリス経済を成長させるという，明確な意思をあらわしたのである．

しかし，リカード以降の経済学はリカードを単なる「成長の理論」としてしか受け継いでこなかったのではないだろうか．

「経済学および課税の原理」は1817年に出版されている．その後，最近の環境問題を契機とした経済学への批判をのぞけば，リカード以降，経済学は，マルクス経済学・近代経済学を問わず，一貫して経済成長のための議論をおこなってきた．

3．スミスの有限な自然

環境の時代を迎えた現在，無限の自然のうえで無限の商品と無限の成長を求めることがいかに無意味であるかは，論じるまでもない．

そこで，有限な自然のうえでの有限な経済成長という視点でリカードの経済学の原理を読み返すと，どのような解釈や評価が可能であろうか．

環境の時代の経済学を展開するために，リカードは何を提示してくれるだろうか．

有限な自然のうえで無限の商品を論じたりリカードの理論をより明らかにするために，スミスとの比較を通して検討していく．

① スミスの有限な自然

イギリスでは他の国にさきがけて18世紀後半から

産業革命がおこなわれ，これに照応してスミスを創設者にリカードを完成者とする古典経済学が成立した．

ところが，同じ古典経済学といってもスミスとリカードの経済学で論じられている自然には大きなちがいがある．

スミスは「諸国民の富」のなかで「人々を養う生産には限りがあり無限ではありえない」と明言している．

「(人々は) その国の土地と労働の年々の生産物によって等しく扶養されている．この生産物は，たとえそれがどれほど大であろうとも，けっして無限ではありえず，必ず一定の限界をもっているにちがいない．」*11

リカードとは対照的に，スミスは自然が有限であり，それゆえ生産物また有限であることを彼の経済理論のなかで明言する．

自然を有限とみなす認識はリカードでもみられたが，経済理論上ではリカードは自然を暫定的に無限とみなすことで無限の商品を論じた．一方，スミスは経済理論上でも自然を有限とみなし，その生産物もまた有限とした．

後の経済学はスミスとリカードにたいして同じ古典経済学という評価を与えているが，二つの経済学における自然観はおおきくちがう．そして，この自然観のちがいが，その理論にも大きな影響を与えている．

スミスはリカードにさきがけて人間の労働だけが価値をうみだすという労働価値説を論じたが，一方で，自然もまた働くと論じていた．

「農業では自然もまた人間とともに労働する．しかし，製造業では自然は何もせず，人間がすべてをおこなう」*12

人間の労働だけが価値をうみだすという労働価値説を論じながら，農業では自然もまた労働する，と言えば，それは矛盾する．

たしかに，商品の生産過程は農業と工業では大きくちがう．農業の場合，作物の種子を蒔き収穫するまでの間，人間の労働が必要であるとしても，作物を育て実らせる大きな要因は自然の働きである．一方，工場では原料から商品になるまでの間，自然はいっさい働かず，すべて人間の労働だけが投入される．

しかし，スミスが言うように，農業においてだけ自然が働き，工業では自然が働かないとすれば，スミス自身が規定した，人間の労働だけが価値をうみだすという労働価値説は農業では適用できなくなる．

そこで，スミスを継承したリカードは労働価値説の完成のためにスミスに反論する．

「製造業では，自然は人間のために何もしないのか，われわれの機械を動かし，航海を助ける風力や水力は，はたして何物でもないのか．最も巨大な機関の運転を可能にする気圧や蒸気の弾性は，自然の贈物ではないのか．まして，金属を柔軟にし溶解する熱素の効果や，染色および発酵過程における大気の分解効果については，言うまでもないことだ．自然が人間に援助を与えていない，しかも，気前よく与えていない製造業など，およそ挙げることができない」*13

スミスを批判し，労働価値説を全産業で一貫させるために，リカードは，農業では自然が働かないと言うか，工業でも自然が働くことを論じる必要があった．そこでリカードは後者を選択し，農業だけでなく工業でも自然は「気前よく」働くと論じる．

ここでリカードは，自然からうみだされる価値を無視することにした．

自然からうみだされる価値を無視するというのは，自然の働きはまったくない，自然は価値をうみださないと論じることではない．

逆に，自然の恵みは無限であり，それゆえに自然の働き，自然の価値を経済学では考慮にいれなくてもいい，と定義することである．

このような自然の解釈は，まさにリカードが経済学の原理を通して主張した「成長の理論」と同一である．自然を無限と仮定することで，経済学における自然の問題を回避するという論理展開である．

スミスへのこの批判が，経済学原理の本文中ではなく，注釈のなかで簡単に取り扱われていることを見ても，リカードの論じる経済発展にとって自然（無限の自然）は当然の前提であり，その有限性は問題ではなかったことを意味している．

しかし，リカードが例としてあげた無限の自然としての蒸気や熱素などは石炭や石油という化石燃料の産物である．それらは，有限な化石燃料に依存する有限な自然のはたらきである．

有限の資源，有限のエネルギーとは，環境の時代である現在だから言えることだ．当時，工業生産が年々拡大し世界の工場であったイギリスで，この経済学を論じていたリカードにとって，農業だけでなく工業における自然のはたらきを無限ととらえることは，むしろ当然なことであった．

一方，リカードは理論上の無限の自然を利用しても，実際に自然が無限であるとは考えていなかった．

「かりに空気，水，蒸気の弾性および気圧に質の差異があり，専有されうるものであって，しかもそれぞ

れの質のものがほどほどの分量しか存在しないとすれば，それらのものも，土地と同様に，各等級が順次使用されるにしたがって，地代を生ずるであろう．質の劣るものが使用される度ごとに，それらのものを使用して製造される商品の価値は騰貴するであろう．なぜなら，等量の労働の生産性が低下するからである．人間が額に汗してすることは多くなり，自然のすることは少なくなるだろう」*14

無限の自然を前提にしていたゆえに，自然の問題から自由であった経済学だが，経済成長の末に自然が貧困になったとき，経済学の重要な理論である労働価値説は大きく揺れはじめる．貧困な自然のうえでは，働いても働いても成果が得られない労働だけが残り，労働価値説は破綻する．労働価値説という価値基準を失った経済理論もまた破綻する．

このような未来をリカードは予測していた．

② 労働の質

リカードとは対照的に，スミスは有限な自然のうえでの有限の商品を彼の経済理論においた．

この有限な商品は，「諸国民の富」第二編，第三章「資本の蓄積について，すなわち，生産的および不生産労働について」のなかで論じられている．

「生産的労働者も不生産的労働者も，さらには全然労働しない人々も，そのすべてはその国の土地と年々の生産物によって等しく扶養されている．この生産物は，たとえそれがどれほど大であろうとも，けっして無限ではありえず，一定の限界をもっている」*15

スミスは有限な商品を論じる際に，同時に労働の質を論じた．生産的労働と，不生産的労働である．

「労働には，それが加えられる対象の価値を増加させる生産的労働（productive labour）と，そうではない不生産的労働（unproductive lacour）がある」*16

例えば，工場の労働者は，加工する材料の価値に，自分自身の生活費と資本家の利潤の価値を付加する生産的労働をおこなっている．ところが，召使いの労働は，労働ゆえに価値をうみだすが，消費するだけであとにはなにものこすことがない．

無限な自然のうえでの無限の商品であれば問題にならなかったことだが，有限な自然のうえでの有限の商品では，自然や労働は有効に利用しなければならない．それゆえ不生産的労働はなるべく減少させ，生産的労働を増やさなければならない，とスミスはいう．

さらにスミスは，有限な自然のうえでの生産的労働の中身を吟味する．

「いなかは都会に生活資料や製造業の原料を提供する．都会は，いなかの住民にその製造品の一部を送りかえすことによって，この供給にむくいる．物質（substances）の再生産が全然おこなわれず，またそれをおこなうことも全然できない都会は，実はその富や生活資料の全部をいなかからえている」*17

農業も工業もともに価値を付加するという意味では生産的な労働である．しかし，具体的な物質（substances）をうみだすという意味では大きく異なる．農業では農地から毎年作物がうみだされるが，工業は自然の物質を消費して加工するだけである．つまり，「農業は物質を生産するが製造業はそれを変形させるにすぎない」*18．

それゆえ，農業労働こそがもっとも生産的である，とスミスは考えていた．

自然を無限とみなしたリカードとちがい，自然を有限とみなしたスミスは，農業と工業の生産・労働のありようをまったくちがう質のものとして理解していた．

さらにスミスは，農業労働について言及する．

「もっとも重要な農作業は，自然の多産性を増進させることである……自然の多産性を人間にもっとも有利な植物の生産にふりむけるよう意図することである」*19

有限な自然のうえでは，自然の生産力は限られている．そこで，農業労働によって自然を豊かにし自然の生産力を高めることで，経済的価値だけでなく物質的にも豊かになり人間社会が豊かになる，とスミスはいう．

工業では自然は消費され加工されて貧しくなる一方であった．しかし，農業では労働によって自然はますます豊かになり，国も豊かになる，とスミスはいう．

スミスは具体的な富をうみだすという視点から労働を3つにわけた．価値をうみだすが単に富を消費するだけのサービス業のような不生産的労働・価値をうみだすが，自然を消費し加工するだけの工業労働・価値をうみだし物質もうみだす農業労働，の3つである．

工業労働も農業労働も生産的労働してスミスは評価しているが，真に生産的労働とは農業のことである．

さらに，スミスは労働者自身にとっての労働の意味，労働の質をも論じた．

「商人は……人間の愚劣さや不正といういっそう不確実な諸要素にも自分の財産をゆだねざるをえないのである．これに反して……いなかの美しさ，田園生活の楽しさ，それが保証してくれる心の平穏さ，・・・田園生活が現実に与えてくれる自主独立，これらのものはあらゆる人を多かれすくなかれひきつける魅力を

もっている」*20

「工匠というものは，自分の生活資料を顧客からひきだすところの，その顧客の使用人である．ところが，自分の土地を耕作し，しかも自分自身の家族の労働から自分の必要な生活資料をひきだす栽植者というものは，真に一個の主人であり，世界きっての独立者」*21

商人は不正に悩み，工業の労働者は資本家の使用人である．しかし，農民は主人であり独立者であると，農業労働の精神的な独立性をスミスは評価している．

資本主義が高度に発達した日本では，価値追求による自然の消費（環境問題）だけでなく，価値追求の結果として詐欺まがいの労働が横行し，そこでは労働の誇りの喪失などが見られる．これらはまさにスミスの指摘どおりであろう．

一方，労働の質に対する考え方は，リカードには見られない．リカードにとっての労働の質とは，労働密度，労働の強度，熟練度であり，それらはすべて量的な価値に還元されるものだ．[22]

そもそも自然を無限と仮定したリカードにとって，自然を豊かにする労働か，あるいは自然を貧しくする労働か，といった分け方は不要であった．

これは，固定資本と流動資本を論じた以下の文章でも明らかである．

「農業者が播種のために購買する小麦は，パン焼業者がパンを焼くために購買する小麦と比較すれば，固定資本である．前者はそれを地中に放置しておき，一年間は収穫をあげられない．後者はそれを挽いて小麦粉にして，それをパンとして顧客に売ることができるのであって，彼の資本は一週間で拘束を解かれ，彼は同じ業務を更新するか，もしくはなにか別の業務を開始することができる」*23

大地を耕し自然を豊かにして小麦を得る労働も，小麦を消費し加工する労働も，リカードにとっては価値を生産する労働として同等に論じられる．

小麦（自然）が有限であれば，パン焼業者（工業）のパンの生産は小麦の生産（農業）に規定される．しかし，小麦（自然）が無限であれば，パン焼き業者は制限されずに，無限にパン（商品）をつくりだすことができる．

しかも，小麦を資本として抽象的な価値におきかえて考えてみると，小麦を種子として播種し収穫する農業と，小麦を原料として加工する工業では，資本の回転率が異なり，農業よりパン焼き業者のほうが有利である．

ここで，スミスとリカードはまったく逆の評価をおこなう．

スミスは，有限な自然のうえでは自然も働く農業を工業よりも有利なものと考えた．しかし，リカードは無限の自然のうえで，自然を消費し加工する工業を有利なものと評価したのだ．

リカードは，農業労働の工場での労働も，自然を豊かにする労働も自然を消費し加工するだけの労働も，すべて同じものとして議論した．リカードにとっての課題は，労働の質ではなく，労働によっていかに大きな価値を獲得するかであった．

スミスにとって生産とは具体的な物質（substances）の生産であった．一方，リカードでは，労働による生産の対象は物質や使用価値などの具体的なものではなく，それらから遊離した抽象的な価値の生産が重要視される．

しかし，労働の質が問われないことで，自然を貧しくする労働がはばをきかせたように，使用価値や商品の質が問われないことで問題もでてくる．

それは，具体的には合成の添加物を混合した食品，農薬を大量に残留した農産物という形で現在みとめられるだろう．それらは，確かに生産され販売されているという点で商品である．しかし，それらの商品は本来の食品や農産物の目的である生命の維持という使用価値は有していない．むしろ，生命の維持という視点からは，使用価値を喪失した商品である．

リカードの経済学が労働や商品の質を問わないことで，様々な理論を展開することが可能であったことは評価される．抽象的な経済空間のなかで経済活動を単に量的なものとして評価することで，経済学は新たな一歩を踏みだしたからだ．

しかし，労働や商品の質を問わない経済学は，同時に，労働や商品の質を論じることができない経済学でもあったのだ．

さいごに

リカードとスミスの議論だけから，ここまで論じることが妥当であるかどうかは，今後さらに議論を深める必要があるだろう．

従来の経済学では，スミスもリカードも同じ古典経済学として理解され評価されていた．従来の経済学が抱えていた階級支配や，分配という問題意識では，スミスもリカードも，同様なレベルで評価することが可能であっただろう．

しかし，我々は有限な地球に生き，環境の時代を乗り越えなければならない．という課題を背負わされて

いる．そのような問題意識で，スミスとリカードを分析したのが本稿である．

残念なことに，本稿のような視点でスミスとリカードを議論した文献に出会うことは少なかった．

唯一，玉野井芳郎の議論を紹介することができる．玉野井は「エコノミーとエコロジー」のなかで「自然をめぐる古典的論争」*24として，スミスとリカードの自然観を比較している．

玉野井はそこで，スミスの語る自然は「おどろくばかり豊富」であるがリカードの自然は「生きた自然」ではない，と比較するだけで論を終わっている．

残念なことに，本稿で中心的に論じた，リカードの無限の商品と無限の自然，スミスの有限な自然のうえでの有限な商品，には触れられていない．

本稿の議論の視点は，従来論じられてこなかったユニークな視点であると考える．それゆえ，既存の研究を引き継ぎ，発展させるという方法がとれなかったのが残念である．

文　　献

＊1 鳥羽卓也・吉沢芳樹訳　1987　リカード：経済学および課税の原理，岩波書店，東京，上巻　18-19頁
＊2 同上書，106頁
＊3 同上書，109頁
＊4 同上書，133-134頁
＊5 同上書，135頁
＊6 同上書，171頁
＊7 同上書，179頁
＊8 同上書，190頁
＊9 同上書，130頁
＊10 同上書，153頁
＊11 大内兵衛・松川七郎訳　1959　アダム・スミス：諸国民の富，岩波書店，東京，2巻　398頁
＊12 同上書，2巻　396-397頁
＊13 リカード，前掲書，114頁
＊14 同上書，113頁
＊15 スミス，前掲書，2巻　340頁
＊16 同上書，2巻　337頁
＊17 同上書，2巻　419頁
＊18 同上書，2巻　421頁　編者キャナンのコメントより
＊19 同上書，2巻　396頁
＊20 同上書，2巻　422頁
＊21 同上書，2巻　424-425頁
＊22 リカード，前掲書　29頁
＊23 同上書，37頁
＊24 玉野井芳郎　1978　エコノミーとエコロジー，みすず書房，東京　81頁

Summary

David Ricardo who accomplished classical economics developed his economic theory assuming that commodities are infinite in his essay "On the Principle of Political Economy And Taxation", while Adam Smith who is also a classical economist pointed out that commodities were limited because natural resources were finite, in his essay "An Inquiry Into The Nature and Causes of The Wealth of Nations".

The outlook on nature which Smith obtained on his economic theories led two sorts of labour, productive and unproductive.

Smith treated of the quality of labour, but, Ricard had his attention only to the quantity of it.